

# ポポフ ニュース

# 19

2012年6月号

No.



ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと願っています。



◀世界女性の日のポポフメンバーたち

2011年

- 7月9日 ●未来のサイエンティスト養成事業キックオフイベント記念講演会  
「自然に学び、驚く心を育てるために～ゴリラに学ぶ～」(山極寿一) 京都市青少年科学センター(京都市)
- 7月3日 ●朝日カルチャーセンター公開講座アフリカ学その2、変わりゆくアフリカ「ゴリラに学ぶアフリカ人類史」  
(山極寿一) 朝日カルチャーセンター千葉(千葉市)
- 7月22日 ●JST/JICA SATREPS Workshop「アフリカ熱帯林における人と自然の共存戦略」  
京都大学稲森財団記念館(京都市)
- 7月24日 ●日本の伝統食を考える会30周年特別講演「ゴリラの生活から人間の食の原点を考える」(山極寿一) エル大阪(大阪)
- 8月5～7日 ●ポポフうちわ展とポポフカフェ 堺町画廊(京都市)
- 8月8日 ●伝統をつなぐ猿、継ぐこと・伝えること「狐猿ばなし」(鳳らん太・花子・山極寿一)  
都芸術センター(京都市)
- 9月7日 ●2011 京都大学ジュニアキャンパス特別講義「ゴリラの行動から人間の不思議な特徴を考える」(山極寿一)  
京都大学時計台百周年記念ホール(京都市)
- 9月12日 ●平成23年度環境省委託事業「ヒトと自然との共生懇談会」第3回懇談会「生物多様性の保全と持続可能な  
利用へ向けた地球戦略」「アフリカ熱帯雨林の生物多様性保全とエコツーリズム：ゴリラ観光の現場から」  
(山極寿一) 環境省(東京)
- 9月18日 ●池水慶一「毛深き人たち」記念講演会「毛深き人たちーゴリラとヒトの間」(山極寿一) 名古屋市美術館(名古屋市)
- 10月8日 ●東京で学ぶ京大の知第2回「ゴリラの社会に探る人間家族の起源」(山極寿一) 京都大学東京オフィス(品川)
- 11月3日 ●日本臨床心理士会研修会講演「ゴリラの子育てに学ぶ」(山極寿一) 花園大学(京都市)
- 11月12～13日 ●第14回サガフォーラム、ブース出展(戸田恵美) 熊本市動植物園(熊本市)
- 11月24日 ●鳥取のちフォーラム第一回「みみをすます日」「ゴリラに学ぶ共感社会の起源」(山極寿一)  
とりぎん文化会館(鳥取市)
- 12月5日 ●西方寺特別講演「ゴリラとご縁」(山極寿一) 西方寺(京都市)
- 12月11日 ●サイエンスカフェ「ゴリラとヒトの間ー人間が持つ不思議な特徴の由来を探る」(山極寿一)  
ガリレオ・ガリレイ(名古屋市)
- 12月16日 ●京都大学GCOE路上サイエンストーク「ゴリラとすずすひととき」(山極寿一) 御池地下街 Zest(京都市)
- 12月16～25日 ●あべ弘士展 堺町画廊(京都市)
- 12月17日 ●オムロン文化フォーラム「共感社会の由来と未来ーゴリラの社会から考える」(山極寿一)  
京都リサーチパーク(京都市)
- 12月18日 ●京都チャイルド・トラスト第28回子育て講演会「脳の進化と共感社会」(山極寿一)  
キャンパスプラザ京都(京都市)

2012年

- 2月11日 ●第1回屋久島森羅万象森森会議基調講演「人間を創った森とは何かーゴリラが教えてくれたこと」(山極寿一)  
屋久島安房公民館(屋久島町)
- 2月12日 ●日本学術会議シンポジウム「ワイルドライフサイエンスー森、人、心の由来をめぐって」  
屋久島宮之浦公民館(屋久島町)
- 3月5日 ●朝日カルチャーセンター中之島教室「自然・文明・環境ー3.11 後を生きる」(梶田真章・山極寿一)  
朝日カルチャーセンター中之島(大阪市)

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	39,017	ニュースレター印刷費	26,775
講演会・シンポジウム カンパ	94,400	ニュースレター・ホームページ作成費	28,450
展覧会売上	75,900	ポポフグッズ材料費	37,380
作品売上寄付	41,500	カレンダー製作費	44,550
ポポフグッズ売上(現金)	318,694	郵送費	41,980
寄付(現金)	1,215,383	ポポフへ送金	1,953,000
売上・寄付(郵便振替)	973,903	次年度へ繰越金	626,723
受取利子	61		
計	2,758,858	計	2,758,858

ろうきん東海NPO団体等寄付システム、日本グレイトエイブス保護基金、ASEEDJAPANESE「ケースタイゴリラ」、エネオスクリック募金から、寄付金をいただいています。



## 20周年を迎えるポポフ

ジョン・カヘークワ

今年でポポフは設立以来 20 年になります。ポポフは 1992 年にコンゴ民主共和国の東部キブ州にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺にあるコミュニティで、自然資源の持続的な保全を目的に設立されました。まず第一に実施したのが環境教育です。ポポフは幼稚園、小学校、中学校という 3 種類の環境教育学校を創設しました。中学校は 6 年制で、上級生はアグロフォレストリー（農林学）を学びます。これはアンガ・ポポフ・ミティ複合学校と呼ばれています。

カフジ・ビエガ国立公園の近隣に住む新世代の子どもたちは、環境を保護する重要性を学ぶ必要があります。彼らはまず、1970 年代初頭に人付けされたゴリラ 2 集団の歴史を学びます。これらの集団は最初の公園長のアドリアン・ディスクリベールと、ピリピリやミシエベレという初代のトラックーたちの努力によって、人間と親しくなりました。かれらの勇気ある行為によって、野生のゴリラたちは敵意を解いて観光客たちを受け入れるようになりました。

中学校の 5 年次と 6 年次の生徒たちは、国立公園の本部があるチバンガ、農業研究所があるムルング、紅茶のプランテーションがあるンバーヨ、その他あちこちにある村に派遣されてさまざまな実地訓練を受けます。アンガ学校ではコンゴ政府に正式に認められた教育がなされています。中学校の 6 年間で修了した生徒たちは国の卒業証書を授与されますが、仕事にすぐつけるとは限りません。職にあぶれた若者たちは保護区に不法に侵入して、伐採、蜂蜜採集、薬草採集、鉱物採掘、密猟などの活動を行うようになります。ポポフはこれまで、これらの不法活動に終止符を打つために、さまざまな仕事を創出して若者たちを雇用してきました。ポポフの学校に働く 25 人の教師たちがその例です。彼らの多くは以前、不法



な活動をしたために逮捕された経歴があります。しかし、今は立派に教員として子どもたちに自然保護の重要性を教える立場になっています。生徒の親たちも学校の果たす役割を注意深く見守り、環境破壊を止めるようになりました。これまでに 3 人の生徒が国家試験で 100 点を取っています。多くの親たちが子どもたちをアンガ学校に入学させたいと思うようになりました。カフジという世界遺産のそばにある学校として、アンガ学校はキブ地方のモデル校となっています。

生徒の親たちは何とか学費を工面していますが、なかなか授業料を払えない子どもたちがいます。中学を卒業しても大学へ行けない生徒たちがほとんどです。今年は日本支部の戸田恵美さんから助成金の申し出があり、国家試験に合格したマオンビ・バハヤ・ジュスチンさんが 4 年間の奨学金を得ることができました。彼女はさっそくムルングの大学に入学して最初の 1 年を過ごしています。ジュスチンさんは 2003 年にアンガ学校に入学し、カフジ・ビエガ国立公園の職員と結婚して今は 7 人の子どもがいます。毎日 10 キロメートルの急坂を上り下りして大学へ通っています。

もうひとつポポフが力を入れてきたのは苗木センターです。1970 年にカフジ・ビエガ国立公園が設立されたとき、国は周辺に住む人々と土地の調停をしませんでした。その結果、村人たちの畑と公園の保護区の間には緩衝帯が設けられませんでした。そのため、保護区からは野生動物が畑に侵入して作物を荒らし、村人は公園内に入り込んで薪や薬草を採集して監視員に逮捕されるという事件が相次ぎました。緩衝帯の欠如が住民と公園との軋轢を増加させる原因となっているのです。

アンガ学校では生徒たちに植樹の重要性を教えています。1997 年以来、ポポフは公園周辺の村々に植樹をする事業を行い、村人たちと一緒に苗木を植えてきました。これまでに約 400 万本の苗木が育成され、公園周辺に植えられました。苗木は大きくなるまでに 7 年ほどかかり、成長すると建材、炭、薪など多くの用途に利用できます。この地方は火山性の肥沃な土壌によって農業に適し、昔から高い人口密度を支えてきました。多くの地域が過剰な開墾によって土壌流出を起

▶真剣なまなざしで学ぶ中学生たち





していますが、公園周辺はポポフの努力によって豊かな緑に包まれるようになりました。

アンガ学校の生徒たちも苗木センターの活動に従事し、これまでに12万9千本の苗木を育成しています。苗木を配った先で、苗木が成長する世話をするのも生徒たちの仕事です。また、魚の養殖池を作って、現在2つの養殖池で成長の速いティラピアを養殖しています。これらの魚を定期的に村に配ることで、不足しがちな動物タンパクを補い、密猟や密漁を減らそうという試みです。

ポポフの20周年を祝って、今年の9月には盛大な行事を

催す予定です。これまでポポフの活動にかかわったすべての人々が集い、ポポフの活動を振り返り、まだポポフに参加していない人々とこれからの活動を考える会にしたいと思います。また、これを機にポポフの活動に役立つ本をそろえて図書館を設立しようと思っています。ポポフの活動を本にしたという希望もあります。どうか皆さん、楽しみにしてください。



## バサボセさんガボンへ行く

山極寿一

ポポフの理事バサボセ・カニユニさんが、ガボン共和国の南西部にあるムカラバ・ドゥドゥ国立公園を訪れました。ここは21世紀の初めから、中部学院大の竹ノ下祐二さんたちといっしょにゴリラやチンパンジーの調査をしてきた場所です。カフジでも、バサボセさんと私はゴリラとチンパンジーがどうやって共存しているかをテーマに調査を継続してきました。今回はその比較の面から、とても貴重な機会でした。

でも今回バサボセさんがガボンを訪問したのは別の目的がありました。私たちは2009年から、JICA（国際協力機構）とJST（科学技術振興機構）の助成で地球規模対応課題国際技術

協力「野生生物と人間の共生を通じた熱帯雨林の生物多様性保全」というプロジェクトをムカラバ国立公園で実施しています。その目的のなかに、ガボン人研究者の育成と地元の住民参加型の保護活動の促進があります。バサボセさんは私と共同研究を行ってその成果を世に出し、京都大学で博士の学位を取得しました。ポポフの活動に積極的に参加して現在はIGCP（国際ゴリラ保護計画）の調整員という重要な仕事についています。ガボンの研究者や地元の人々に自分の経験を話し、ガボンで同様な計画を実施するための助言をもらいたいというのがバサボセさんを招へいた目的でした。

昨年8月にバサボセさんと私はムカラバに10日間ほど滞在して森を歩き、ゴリラや他の哺乳類を観察するとともに、調査の補助をしてくれている村人たちと毎日話をしました。ガボンから遠く離れた日本に住む私と違って、同じアフリカの熱帯雨林で研究や保護活動に従事してきたバサボセさんの話は、村人たちの心に深い共感を与えたようでした。

ガボンは長い間フランスの植民地として統治され、独立後

▶ガボンのムカラバを訪問したバサボセさん（後列左から2番目）





もフランスを始め欧米諸国の伐採会社や石油会社の大きな資本が投入されてきました。村人たちは雇用の多くをこれらの会社に依存し、学校、病院、道路などのインフラをすべてこうした外からの資本に頼ってきました。20世紀の終わりになって石油会社が撤退し、伐採が他の地域へ移っていくと、村々はこれらの会社の遺物とともに取り残されました。外からの援助は期待できないし、もはや昔の伝統的な暮らしにもどることはできません。自分たちで何も作れない、というあきらめのムードが村々には流れています。

ガボン政府は2002年に、国内に13の国立公園を設立して自然資源の持続的利用を図る政策を発表しました。ムカラバの国立公園もそのひとつです。ガボンの中央部に作られたロペ国立公園は2005年に世界遺産に指定されました。資源開発型から資源の保全と利用へ向かうためには、エコツーリズムを導入して観光資源としての利用を促進する必要があります。私たちのプロジェクトは、ムカラバの生物多様性の保全を図りながらエコツーリズムを推進しようという目標をもっています。1980年に世界遺産に指定され、すでに40年以上にわたるゴリラツーリズムの経験をもつカフジはその格好のモデルです。バサボさんの話は、同じように独立以後に困難な自立の道を歩んできたコンゴ民主共和国の人々、経済や政治の破たんの中で自然資源の保全や利用に取り組んできたカフジやポポフの活動を紹介することで、ムカラバの人々に大きな勇気を与えてくれたのです。

バサボセさんがチンパンジーやゴリラの研究を始めたとき、コンゴ民主共和国の国立公園はすでに設立され、ゴリラのツアーも始まっていました。まだ黎明期にあるムカラバを見て、バサボセさんは強く心を動かされたようです。ここはカフジほど大きな人口を抱えていないし、国境からも遠く、政治的な混乱もありません。野生動物と人間がまさに正面から渡り合える場所で、多くの可能性を見つけられるに違いないと熱っぽく語ってくれました。バサボセさんはムカラバ訪問の後、首都のリーブルビルで生物多様性の保全とエコツーリズムの推進に関するワークショップに参加し、コンゴ民主共和国を始めルワンダやウガンダで実施されている保護活動やポポフについて紹介しました。ガボンでは林学、獣医学、分子生物学などの研究者や学生が多く、霊長類学や生態学などの基礎研究がまだあまりポピュラーではありません。彼らにとっては動物や植物の基礎的な知識が、自然資源の保全的利用という大事業につながることを知るいい機会になったと思います。私たちのプロジェクトにも、これまで霊長類学や生態学を志すガボン人の研究者や学生がいなかったのですが、バサボセさんの訪問以後に3人の学生が霊長類学を学ぶことになりました。とてもうれしく思っています。

私たちのプロジェクトはこれからまだ2年半続きます。その間にジョンさんをガボンへ招へいして、NGOの運営やゴリラのエコツーリズムについてムカラバで指導してもらおうと考えています。また、ガボンの人々もぜひカフジに来てもらい、ポポフやカフジのゴリラたちと交流してほしいと思います。アフリカのゴリラの生息地どうして人々の交流が始まり、自然資源や次世代の子どもたちへの思いが一つになれば、きっと明るい未来が開けてくるだろうと思うのです。



### カフジとポポフ訪問記

このたび、ポポフにいつも関心を持っていただいている万野美香さんがカフジのゴリラとポポフ本部を訪問されました。内戦以来まだ日本人があまり訪れない中、単身でルワンダやコンゴを歩いてこられました。貴重な体験なので無理のお願いしてニュースレターに寄稿していただきました。

## カフジを訪れて

万野美香

思い返せば、子供の頃見た野生の王国というテレビ番組が「いつか私もアフリカ大陸へ行き、野生動物を自分の目で観察したい」と思ったきっかけでした。

十数年後、私はサバンナで動物たちを見ることができましたが、一番好きな野生ゴリラを観察するという希望を叶えるのはとてもハードルが高いものでした。

「いつか、ザイール（現コンゴ民主共和国）でゴリラたちに会いたい」と願いながらも、ツアーもガイドブックもない国へ研究者でもテレビ関係者でもない、ただゴリラが好きというだけの自分が行けるとは思えなかったのです。

今回、色んな偶然と、色んな方のおかげで、長い間思いを馳せていたカフジ・ビエガ国立公園で念願のゴリラ観察をすることができました。

映像でしか見たことのない彼らに実際に出会えたときの感動を言葉に置き換えることはできませんが、観察が許される一時間は、とても暖かい空気に包まれていて、夢のようなあっという間の大切な時間でした。

動物園のゴリラしか知らなかった私にとって、集団で暮らしている彼らの姿は本来の家族の姿だと嬉しく思うと同時に、間違いなく彼らは私たち人間の祖先だと思わせるような、そしてむしろ人間は今、彼らから学ぶべきだと思える凛とした

生き方を垣間見た気がします。

愛しく思っていた気持ち、彼らを守りたいという気持ちはさらに深まりました。

願いをしてポポフの学校への訪問もさせていただき、子供たちとダンスをしたり、植樹をしたりと素敵な時間を過ごさせていただきました。

ジョンさんから直接ポポフのお話を伺えたことも貴重な時間でした。

長い年月をかけて、心を尽くされてきたポポフに関わってこられた方々の信念や努力が実感として伝わってきました。

私の感じたコンゴはとても美しい本物の自然や穏やかな風景と、埃っぽい喧騒な街が隣り合わせに、それが当たり前と言わんばかりに共存し、子供たちの屈託のない笑顔が印象的なとても魅力的なところでした。

ほんの数日間の滞在でしたけれど、私にとってかけがえのない貴重な経験でした。

日本にいて野生ゴリラを守るために私にできることは何だろう・・・そういつも考えていましたが、カフジのあの空気を感じた体験者として、今私にできることは自分が体験し、感じたことを一人でも多くの人に伝えることなのかなと思っています。

私のように「カフジのゴリラに会いたいけど行けない」と思っている人に。

そして少しでも興味をもってもらい、一人でも多くの日本人に彼らと会ってもらい、何かを感じてもらえることを願っています。

それが必ず、彼らを守ることに繋がると信じて。

▼好奇心いっぱいのコドモゴリラ（撮影：万野美香）



## ゴリラたちの近況

山極寿一

多くの人々の協力によって、このたび2つの論文を刊行できました。それぞれ Nova Science 社、Springer 社から出た本の1章となっています。1970年代から個体識別をして追跡してきたゴリラの集団の30年余りにわたる生活史を分析し、その間に起こった変化を解説しています。大きな発見としては、カフジのゴリラには好まれる出産期があるらしいということです。これまでゴリラの動向がよくわかっているヴィルンガのマウンテンゴリラには、決まった出産期がないと報告されてきました。ところがカフジのゴリラが出産した月を調べてみると、5～7月に多いことが明らかになったのです。カフジはヴィルンガよりも標高が低く、6～9月の乾季に果実がたくさん実ります。どうやらこの時期に合わせて出産し、栄養価の高い果実を食べて授乳しようという傾向があるようです。

また、1996～1998年の内戦の時期に多くのゴリラが殺された後、出産が急増してベビーブームになったことがわかりました。カフジで初めて見られた子殺しがそのきっかけをつくったようです。これはチマヌーカ集団で起こり、2003年に移籍してきた3頭のメスの赤ちゃんが殺されました。以後、チマヌーカ集団では立て続けにメスが出産し、4組の双子が生まれるなど、これまでに報告されたことのない効率で子どもが増えています。内戦によってゴリラの集団内外の社会関係が大きく崩れ、子どもがその大きな犠牲になった後に、繁殖が高まるような傾向がゴリラの生殖生理に組み込まれているのかも知れません。カフジのゴリラの生活史をヴィルンガのマウンテンゴリラと比べてみると、初産年齢が高く、出産間隔が長く、ゆっくりした生活史をもっていることがわかりました。おそらく、果実の多い環境は生活史を遅らせ、子殺しなどのオスの暴力は生活史を早める傾向があるのだろうと私は思っています。こういったゴリラの生活史についてはもうすぐ日本語で発刊される拙著『家族の進化論』に詳しく述べていますので、興味のある方はぜひご覧ください。

今回の英語の論文では、ゴリラとチンパンジーがどのように同所的に共存しているかについても分析しています。同じように果実を好む2種の類人猿が、けんかせずにごちゃごちゃ暮らしているのか。それはこれまで大きな謎でした。私たちはゴリラとチンパンジーが果実の食べ方や、果実が不足したときに選ぶ補助食物を違えることで共存していることを発見しました。また、ゴリラは食物を変えても集団のまとまりを崩さず、チンパンジーは食物によって付き合う仲間を変えます。それが2種の社会性の違いにも現れているのです。では、彼らと共通の祖先をもつ私たち人間は、いったいどのような食物を食べて今の社会性を獲得したのか。それはこれからの研究課題です。



またこれらの論文では、カフジ・ビエガ国立公園の近くに  
住む人々が保護区を維持するために払っている犠牲と、それ  
を軽減するためにポポフがこれまでやってきた保全活動を紹  
介しています。住民の生活状況と不法活動などこれまでの経  
緯を分析し、地元の手で作ったポポフの役割の重要性を示す  
とともに、自然資源の保全的利用を図るために有効な方策を  
提案しています。マウンテンゴリラのツアーよりもカフジの  
ゴリラツアーのほうが歴史が古いことを欧米の人々は知りま  
せん。この英語論文によって世界の目がカフジに向けられて  
ほしいと願っています。

さて、この1年に起こったゴリラたちの変化について述べ  
ておきましょう。チマヌーカ集団では、新たに赤ん坊が生まれ、  
総勢34頭の大集団になりました。2003年の12月に最初に生  
れた赤ん坊はもう8歳になりました。4組の双子のうち、1組  
は片方が亡くなってしまいましたが、3組はすべて健康に育っ  
ています。きっとお母さんのお乳がたくさん出ていて、父親  
のチマヌーカの保護が行き届いているのだらうと思います。

ガニャムルメ集団からは2頭のメスが子どもを連れてい  
なくなりましたが、新しく赤ん坊が生まれました。失踪したメ  
スたちの行方は分かっていません。人と接触した跡は見られ  
ないので、おそらく別のオスのもとへ移ったのだらうと思  
います。ムガルカはもう24歳にもなるのにまだひとり者です。  
以前は10頭以上のメスに囲まれて暮らしていたこともあつた  
のですが、なかなかメスが居ついてくれません。小さいとき  
にワナにかかって右手を手首から失っていることがハンデに  
なっているのかも知れません。両手で胸をたたくドラミング  
を彼は片手でしか行うことができないのです。いつも公園近  
くの森で暮しているので、会いに行きやすく、ムガルカは観  
光客の人気者です。先日放映されたテレビの「危機にある世  
界遺産」という番組にも映っていました。早く素敵なパート  
ナーを得て、父親になってほしいものです。

大きな変化が起こったのはマンコト集団です。ここに他の  
集団のメスや子どもたち、それに若いオスたちも合流して大  
きな集団になりました。おそらくシルバーバックを失ったピ  
リンドウワ集団や他の集団が合流したのだらうと思います。  
おかげでマンコト集団は16頭から23頭になりました。ブ  
ラックバックの若いオスが3頭いるようなのですが、まだ詳  
しいことは分かっていません。また、やはりシルバーバック  
を失ったムファンザラ集団には、その後新しオスが加わっ  
て安定したようです。ランガ集団には子連れメスがまとま  
って入ってきたようです。ムプングエ集団にも新たにメスが加  
わり、赤ん坊が生れたという知らせが入ってきています。また、  
ナマディーニ、チブブーラという2集団に新たに名前をつけ  
て人付けを開始しました。ただ、これらの集団はまだ十分に  
人に馴れてはいないので、ベッドや糞の大きさから判断した情  
報がほとんどです。チマヌーカ集団やガニャムルメ集団のよ  
うに近くで直接観察ができるようになれば、詳しいことが分  
かるでしょう。



▲阿部知暁 画

## 刊行された論文

Yamagiwa J, Basabose AK, Kahekwa J, Bikaba D, Matsubara M, Ando, C, Iwasaki N, Sprague DS (2011). Long-term changes in habitats and ecology of African apes in Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo. In: Plumtre AJ (ed), The ecological impact of long-term changes in Africa's Rift Valley, Nova Science Publishers, New York, pp. 175-193.

Yamagiwa J, Basabose, AK, Kahekwa J, Bikaba D, Ando C, Matsubara M, Iwasaki N, Sprague DS (2011). Long-term research on Grauer's gorillas in Kahuzi-Biega National Park, DRC: life history, foraging strategies, and ecological differentiation from sympatric chimpanzees. In: Kappeler PM, Watts DP (eds), Long-term field studies of primates, Springer, New York, pp. 385-412.

- ★6月2日 堺町画郎(京都市)  
16:00より ポポフ報告会 カンパ制  
お話し「野生ゴリラの観察体験と動物園の育児体験」(長尾充徳:京都市動物園)  
19:00より 「アフリカの魔法の小箱」親指ピアノライブ  
～ロビンロイド&近藤ヒロミ～ (カリンバとムビラ)  
予約 2000円 当日 2300円
- ★7月12日 京都国際会館(京都市)  
京都府教育委員会講演「ゴリラの子育て、人間の子育て」(山極寿一)
- ★10月5～6日 京都シネマ(京都市)  
映画館で見る狂言ゴリラ楽「ゴリラの子守歌」(茂山千三郎・ひらのりょうこ・山極寿一)
- ★11月17日～18日 札幌市円山動物園(札幌市)  
第15回サガシンポジウム ポポフの紹介とグッズ販売を予定しています。

集団名	シルバー バック	ブラック バック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13歳以上	8-12歳	8歳以上	6-8歳	3-6歳	0-3歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		17	1	4	11	34
ムファンザーラ	1		9	5		4	19
ランガ	1		9		1	3	14
ムプングウェ	1		7			1	9
ガニヤムルメ	1		6		3	3	13
マンコト	1	3	13	4		2	23
ナマディリーニ	1		11	2		2	16
チブブーラ	1		7			3	11
合計	9	3	79	12	8	29	140

- やまぎわじゅいち・あべ弘士著『ゴリラとあそんだよ』 福音館
- 吉田昌夫・白石荘一郎編『ウガンダを知るための53章』 明石書店
- 印東道子編『人類大移動—アフリカからイースター島へ』、朝日選書
- 横山俊夫編『ことばの力—あらたな文明を求めて』 京都大学学術出版会、
- 山極寿一著『家族進化論』 東京大学出版会
- 梅棹忠夫著・小長谷有紀編『梅棹忠夫の「人類の未来」』 勉誠出版
- 小長谷有紀著『ウメサオタダオと出会う—文明学者・梅棹忠夫入門』 小学館
- 内堀基光著『「ひと学」への招待—人類の文化と自然』 財団法人放送大学教育振興会
- 床呂郁哉・河合香吏編『もの人類学』 京都大学学術出版会
- 松浦直毅著『現代の<森の民>』 昭和堂
- 松田一希著『テングザル—河と生きるサル』 フィールドの生物学⑦、東海大学出版会
- 作道信介著『糞肛門—ケニア・トゥルカナの社会変動と病気』 恒星社厚生閣
- 山極寿一・阿部知暁著『ゴリラが胸をたたくわけ』 月刊たくさんのふしぎ 2014年4月号(第325号) 福音館書店
- 掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』 京都大学学術出版会
- 三谷雅純著『ヒトは人のはじまり—霊長類学の窓から』 毎日新聞社
- 遠藤秀紀著『東大夢教授』 リトルモア



# ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に 口座番号：00810-1-90217、加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新製品です。

- ☆ポポフ絵はがきセット(10枚組) 1000円
- ☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット(5枚組) 600円
- ☆ヒガシローランドゴリラ・ペンダント 2200円
- ☆ヒガシローランドゴリラ・キーホルダー 2200円
- ☆どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り) 3000円
- ★新ケイタイ・ストラップ(白と黒) 2000円
- ★ポポフエコバック 1500円
- ★ポポフ2013年カレンダー(予約販売11月頃配布) 1000円

**2013年  
ポポフカレンダーを作ります。**

200部限定  
見開きA4サイズ  
1部1000円(送料込み)  
発売開始 11月

**ゴリラの写真や絵がいっぱい!!**  
予約を受け付けます。  
ポポフグッズと同様、  
郵便振替でお申込下さい。



◀東ロランド  
ゴリラ・ペンダント・キーホルダー



◀どこでもゴリラ・  
ブローチ(木彫り)



▲ポポフ絵はがきセット

▶ケイタイ・  
ストラップ(黒)



▶ケイタイ・  
ストラップ(白)



▲ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット

## 絵本『ゴリラとあかいぼうし』の読み方と歌のCD販売について



ダビッド・ビシームワさんの絵による絵本『ゴリラとあかいぼうし』(福音館書店)は、ゴリラの言葉がゴリラ語に近づけた発音のカタカナで書いてあります。このため、読み聞かせをするときに、「どうやって発音したらいいの?」と困る方がたくさんいらっしゃるようになりました。そこで、なるべくゴリラに近い発音で読んだ声をCDに録音しました。さらに本の末尾に載せてある「ゴリラとあそぼう」という歌を声とバックミュージックだけのカラオケ調の2種類で録音してあります。このCDを作成費と郵送費、それにポポフへのカンパ代500円を含め1000円で販売します。ご希望の方はポポフ・グッズと同じ要領でご注文ください。折り返しCDを郵送させていただきます。

## チンパンジーと赤ちゃんの話

あるところに、魚釣りが大好きな女の人がありました。女の方はだんなさんと暮らしていて、赤ちゃんがありました。

女の方は魚釣りに行きたかったのですが、赤ちゃんを預かってくれる人がいませんでした。女の方はがまんができず、赤ちゃんをおんぶして魚釣りに出かけました。赤ちゃんを背中におんぶしたまま魚釣りをしていると、そこに一頭のチンパンジーがやって来ました。チンパンジーは「赤ちゃんをおぶってないで、私に預けなさい。私が子守をしてあげるから、思いっきり魚釣りをすればいいよ」といいました。

女の方は一度は断りました。けれど

「私も子どもがいるから子どもの扱いには慣れていない。心配しないで預けなさいな」とチンパンジーが言うので、女の方は赤ちゃんをチンパンジーに預けました。

—唄—

「こどもなしで、森の中で生きていけるのか、ほら今ここに子どもがいるじゃないか」

この唄のあとで、赤ちゃんはチンパンジーの腕の中で眠りはじめました。女の方が魚を釣っている間、チンパンジーは木にぶら下がったり、森の中を散歩したり、とてもよくあかちゃんの面倒を見ていました。魚釣りを終えて、女の方がチンパンジーを呼ぶと、チンパンジーは赤ちゃんを連れて来ました。

森の中で、子守を見つけた女の方は、しょっちゅう魚釣りに行くようになりました。

毎日このようにしていたので、赤ちゃんはすっかりチンパンジーに



なついてしまいました。魚釣りに行くと、赤ちゃんはチンパンジーを捜して、チンパンジーのところへ行ってしまうようになりました。

ある日、チンパンジーは赤ちゃんを連れて、歌いながら、ずっとずっと森の奥の方へ行ってしまうました。

女の方はチンパンジーを何度も何度も呼びました。けれど、チンパンジーはもう戻っては来ませんでした。女の方は頭をかかえて村へ戻って来ました。だんなさんが赤ちゃんはどうしたのかと聞きました。女の方はそこではじめて、チンパンジーが赤ちゃんを連れて行ってしまったいきさつをを話しました。だんなさんは「おまえは、チンパンジーと人間が友だちだと思っているのか」と聞きました。そして

「赤ちゃんを捜しに森へ行け。もしこどもが見つからなければ、もう帰ってこなくていい」といいました。

これでこのお話はおしまいです。人は人であり、動物は動物です。どんなに近づいて、仲良くできたとしても、気をつけなければいけません。人は人であり動物は動物であるからです。

語り：シメヌ・ンゼ 通訳：安藤智恵子 再話・絵：伏原納知子

このお話は 2010 年国際霊長類学会で来日したガボンとコンゴの方々を招いて開いた「アフリカ人研究者による昔話の語り」（9月20日堺町画廊）で語られたお話です。コンゴからは POPOF のジョン・カヘークワさんとバサボセ・カニユニさんが参加しました。ガボンから参加したシメヌさんの語りは、ファン語からフランス語へ、そして日本語へと訳されました。

## ポポフのホームページ

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ビエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、デヴィッド・ビシムワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部

お願い：上記のようなポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

